

当別文芸の会だよりNO.93

H30・4/30 (連絡先・河地良一 TEL090-5076-2550)

平成30年度・当別文芸の会(9年次)の活動がスタート

待ち遠しい春の訪れ、その期待に添えて、春の陽気に恵まれた4月21日(土)、田西会館(弥生)を会場にして、11:00より平成30年度(第9年次)の総会・文芸交流会が開催されました。年度当初の会員は16名。うち当日は12名の会員のみなさんが参加されました。

あいさつ、議事進行は、そのまま代表の河地が担当し、平成29年度の活動報告、会計決算報告と「当別文芸」(第7号)の発刊、会計報告がなされ、監査の久保義雄さんから監査報告があり、会員みなさんから承認をいただきました。

つづいて、平成30年度の活動計画、予算案、「当別文芸」(第8号)の編集についても承認をいただきました。年間の活動については、8、9月と12、1月を休みにして、本年度は8回の開催月にいたしました。主な内容については、読書会が6回、2回は文芸セミナー、文芸交流会などの予定です。

なお、世話人については、そのまま(会則では2年)留任で、会の運営(お世話)にあたっていただくことになりましたので、よろしくお願いいたします。

総会に引き続き、全員で昼食懇談となり、その後、幹事の新名正勝さんの司会進行で、文芸交流の時間を楽しく過ごすことができました。

テーマは特に決めず、参加者が自由に、自分の最近考えていること(思い)、生活のようす、読書傾向、読んでみたい本などについて話していただきました。

話題としては、混沌としている世情、将来に対する不安(健康、家族、老い)などに、どう向き合って生きていくかが課題のようです。

来年は年号も変わり、昭和、平成もオールデイズになっていく時代の変わり目、今年も元気印で生きていきましょう。

5月の読書会案内

次回の読書会は、5月19日(土)、13:30から、白樺コミセンです。

みなさんにお届けした読書本は、昨年、直木賞を受賞した岩手県遠野市生まれの63歳の主婦・若竹千佐子著の「おらおらでひとりいぐも」(河出書房新社)です。遠野弁でたくましく生きている波乱万丈の人生。でも、明るさが取り柄。

そこに、生きるヒントがあるかも。みなさんの感想をお待ちしております。

～土のに匂い、生命の躍動する北国の春、うれしさ満開～

当別文芸の会だよりNO.95

H30・6/21 (連絡先・河地良一 Tel.090-5076-2550)

6月の読書会は鴻上尚史の「不死身の特攻兵」でした

ライラックが映える初夏の季節とはいえ、寒暖の差が大きいこのごろですが、6月16日(土)は天気も回復し、当日は会員11名が参加しての読書会となりました。

副代表兼事務局長の竹原一孝さんの司会進行で、今回は当別町茂平沢出身の佐々木友次さんの生涯を取り上げましたが、75年前のこの戦時中の出来事は、当時の人たちの記憶にしかあまり残っていない隠れた秘話といえましょう。

佐々木友次さんは、大正12年(1923)生まれで、平成28年(2016)に92歳で亡くなっていますが、この佐々木友次さんの数奇な生涯を、当時の陸軍報道員として従軍した高木俊朗が生前、「陸軍特別攻撃隊」に著しています。

そして今回、作家で演出家の鴻上尚史が「不死身の特攻兵」—軍神はなぜ上官に反抗したのか—(講談社現代新書)で、佐々木さんの特攻を取り上げ、晩年の病床での取材内容にも触れています。

当時、特攻兵は死を賭して敵艦に体当たりする任務を負わされたが、帰還を許されない9回もの突撃を回避して基地に戻ったのは何故かなどの内容ですが、佐々木さんは戦後、当別に復員してからも多くを語っていません。

当時の軍部の上層部は、精神論だけで戦争を遂行したのと対比して、私たちは「戦争とは何か」の真実を、後世にしっかりと語り継いでいかなければならないことを、この本を読んで実感したというのが大方の感想でした。

この本の後半で、著者は日本的な考え方の基本にある「世間」と、西欧型の「社会」の違いなどにも触れ、古来から農耕を基本とした生活様式が、日本人の思考の奥底にあることなどにも触れています。

7月発刊の「当別文芸」(第8号)に、大畑裕貴さん、竹原一孝さんが、佐々木友次さんの生涯について書いています。みなさん、どうぞお楽しみに。

7月の読書会案内

次回は7月14日(土)13:30より白樺コミセンです。2016年の本屋大賞を受賞した宮下奈都の作品「羊と鋼の森」(文春文庫702円)を取り上げます。

現在、映画も大ヒット上映中とか。北海道も舞台上で、ピアノの調律士が成長していく姿が書かれています。このたよりと一緒に、お手元にお届けいたします。